

高知県における専門分野「がんにおける質の高い看護師育成事業」成果と今後の展望 —修了生の臨床実践能力の変化と成長—

高知大学医学部附属病院（緩和ケアチーム）

○近藤 恵子

高知赤十字病院

古郡 夏子

高知医療センター

池田 久乃

細木病院

豊田 邦江

高知女子大学

藤田 佐和

【目 的】

高知県で実施した過去2年の「がんにおける質の高い看護師育成事業」の成果と課題を、研修修了生の臨床実践能力の変化と成長に焦点を当て明らかにし、今後の研修事業やがん看護の発展への示唆を得る。

【方 法】

平成19・20年度の研修修了生35名、所属施設の看護部長14名、所属部署の師長33名を対象に質問紙調査を実施し、量的・質的に分析した。所属施設の看護研究倫理審査会の承認を得て、文書にて研究の概要・倫理的配慮を説明し、無記名返送にて同意を得た。

【結 果】

研修修了生20名、看護部長9名、師長13名から返送があり（回収率51.2%）、ほぼ全員が研修参加の意義ありとした。研修目的ごとの実践能力向上の有無についてみると、治療を行うがん患者の症状マネジメントやセルフケア支援能力の高まりありは、修了生45%、師長54%であった。危機状態に応じた精神的支援能力の高まりありは、修了生65%、師長69%、全人的苦痛への支援能力の高まりありは、修了生60%、師長62%であった。療養場所の移行支援能力の高まりありは、修了生35%、師長38%であり、変化なしの主な理由は、〈他職種や他施設との協働には至っていない〉であった。倫理的問題への対処能力の高まりありは、修了生35%、師長54%と師長の評価が高く、変化なしの主な理由は、〈倫理的問題に気づくことはできてもチームで対処するには至っていない〉であった。

修了生30%、部長78%が部署外の活動が変化し、また、修了生90%が、目的以外の実践能力や看護観・看護師としてのあり方の変化を自覚し、研修を機に、修了生70%、師長62%が、自己研鑽やキャリアアップに変化ありと評価した。さらに、修了生55%は、現在も相互交流を図り、自らの実践を高めていた。

【考 察】

本研修は、目的にそってがん看護実践能力の向上に成果が得られており、研修継続の必要性が示唆された。実践能力の変化が少なかった療養場所の移行支援や倫理的問題への対処については、今後の課題とする。

〔平成22年2月13・14日 日本がん看護学会（静岡）にて発表〕